氏　　名　河野洋子（かわの ようこ）
学位(専攻分野)　博　士（教育学）
学位記番号　教　博　第 43 号
学位授与の日付　平成 17 年 3 月 23 日
学位授与の要件　学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻　教育学研究科臨床教育学専攻
学位論文題目　宗教教育の臨床教育学的可能性
——『パンセ』における「考える葦」のレトリック論的解釈——

論文調査委員　（主査）助教授 皆藤　章　教授 矢野智司　助教授 齋藤直子

論文内容の要旨

本論文は，Pascal（1623-1662）の断章集『パンセ』に登場する「考える葦」という比喩言説をテクストとして取り上げ，臨床教育学における方法論のひとつとして位置づけられているレトリック論的解釈の手法を用いて検討することによって，このテクストが有する宗教言説の構造的特性を明らかにし，その解明プロセスから必然的に生まれた「宗教教育」の可能性を探求したものである。

論文は，「考える葦」をレトリック論的に解釈する必然性をこの言説の歴史的な位置づけから論じた第1章「常套句『考える葦』を生み出す背景」，実際にレトリック論によって「考える葦」を新たに解釈した第2章「『考える葦』のレトリック論的再解釈」，超越の位相及び宗教的真理がいかにしてレトリックの認識構造によって解明されるのかを論じた第3章「宗教的真理を語る比喩言説」，第2～3章の論考を基盤にしつつ「宗教教育」のトポスが開かれる可能性を見出した第4章「宗教教育のトポスを開く語りのスタイル」，そして本論文に見られる諸概念の著者なりの位置づけと論考の流れを確認する意図で置かれた序章と，以上の諸論考を踏まえて「宗教教育」の存在意義を臨床教育学的立場から論じた終章によって構成されている。

序章ではまず，「臨床教育学」「宗教教育」について著者なりの位置づけが明確にされた上で，本論文が依拠する臨床教育学の方法が明示されている。次いで，論文全体を俯瞰する形で各章の内容が先取り的に概観されている。著者の言う「臨床教育学」の方法とは，教育の日常で出会うさまざまなことがらをテクストとして見立て，そのテクストにおける言語の仕組みをレトリック論の手法によって解明しテクストにおける新たな筋立ての発見を試みる「実践」を言う。「宗教教育」については，それが特定宗教の「宗教的真理」を伝達するものではまったくなく，宗教を教育することの可能性それ自体を問うことを目指す仮説的呼称であるとしている。この脈絡において『パンセ』は，「宗教教育」の可能性を原理的に問い直し「宗教的真理」の伝達にかかわる内在と超越の「非連続的な連続性」というパラドックス構造を内蔵するテクストとして位置づけられている。

第1章では，「考える葦」が日本で常套句となった背景とその意味について考察されている。まず著者は，日本におけるパスカル研究の歴史的経緯を概観し，Mesnard（1921-）を引きつつ日本におけるパスカル研究が主に哲学・文学の領域においてきわめて高い水準の独創性を有してきたことを指摘する。次いで，パスカル思想が日本の学校教育に紹介されてきた経緯を「考える葦」というアフォリズムに着目した教科書研究を中心にして明らかにしている。そのなかで著者は，パスカルとその思想の象徴としての「考える葦」が日本の学校教育において常套句となっていった点に注目し，哲学・文学領域でのパスカル研究の生産性に比べ教育学研究領域では正面からこれを扱った研究が稀有に近い状況および，学校教育との密接な結びつきに比べ教育学研究領域でのこのような状況との対照性に問題意識を向けている。そして，これらはテクストにおける意味発見の構造をレトリック論的に展開する臨床教育学の方法論から『パンセ』の「考える葦」を解釈することをとおして解明されるのではないかと，日本におけるパスカル研究の第一人者，塩川徹也（1945-）の論考を手がかりに仮説的論

述が展開されている。

第2章では，第1章の問題提起を受けて「考える葦」のレトリック構造が考察される。「考える葦」は，近代が主張する理性優位の人間観の象徴「考える」と中世キリスト教的人間観の象徴「葦」というまったく異質な二つを結合させることによってひとつの新たな人間観を創造することに成功した「生きた比喩」である。しかし著者は，これによって「考える葦」は構造的に解釈され得たのではないと主張する。そして，パスカルの人間観は『パンセ』に見られる「考える肢体」というアフォリズムと一対になってこそ表れるのであり，それによって人間の可能的存在の在りようが探求される方向が指し示されるのであると論じる。それはすなわち，「肉となった真理」を自然的次元での「肉」と超自然的次元での「真理」との逆説的結合のモデルと見立てることによって初めて，「肉体」を離れては存在し得ない人間，この意味で異なる次元の逆説的結合に他ならない人間を語るレトリックが可能になることであると考察されている。

第3章では前章に述べられてきた，人間の生の全体構造を理解する逆説的な内在的超越性について，レトリックの認識構造のメカニズムを考察・検討しながら，超越の位相および「宗教的真理」について考察されている。そこではまず，「考える葦／考える肢体」という一対の比喩言説について，「考える葦」をメタファー，「考える肢体」をメトニミーとして解釈する立場から，「宗教的真理」を暗示する両者の特性が論じられている。この異質な表現構造をもつ一対の比喩言説が装置として連動することによって人間の可能的生が導き出され，「宗教的真理」の開示と伝達において，この比喩言説が自然的次元と超自然的次元との関係構造の提示に貢献することが論じられている。そうして次に，アレゴリー固有の働きに言及しながら，アレゴリーの特性によって「宗教的真理」の本質を捉えて読みとることを可能にするひとつの意味世界の現出について論じられている。これらの論述から，『パンセ』においては「宗教が理性に反するものではないこと」を示す方法として隠喩的言説による宗教的語りの工夫がなされていると考察されている。

第4章では，『パンセ』を「自然な文体」のテクストとして見立てて臨床教育学の立場からレトリック論的に解釈し「自然な文体」に備わる諸条件が考察され，それによって「宗教教育」の可能性を原理的に問い直す試みが展開されている。そのなかで，『パンセ』は，「到来性」を可能にする「texture 性」を備えたテクストであることが指摘されている。texture は本論文を貫く概念とも言えるもので，世界や人間の在りようとしての「二重性」を意味しているが，この「二重性」を語りとしてもつ『パンセ』の「自然な文体」によって宗教教育のトポスが開かれていることが考察されている。

終章において著者はこれまでの論考を鳥瞰し，「宗教教育」の臨床教育学的可能性として，レトリック論的解釈によって導かれた「texture 性」を備えた「自然な文体」という語りのスタイルが教育の地平に導かれる在りように触れている。

論文審査の結果の要旨

本論文は，「人間の日常の在りよう」を解明する臨床教育学の方法論のひとつとして位置づけられている「レトリック論的解釈」という手法を用いて，Pascal（1623-1662）の断章集『パンセ』に登場する語りを比喩言説と見立てて検討したものである。そして，それによって「宗教教育」の可能性を原理的に問い直し，その実現の人間学的要件を明示したテクストとして『パンセ』を捉え直そうと試みている。

臨床教育学が照射しようとする現象は「人間の日常の在りよう」であるが，この意味では人間の歴史とともにある宗教は「人間の日常の在りよう」そのものであり，臨床教育学にとっては不可避の人間的現象と言うことができる。けれども，その現象が示す地平はあまりに壮大であり，一学問領域のみにおいては到底解明し尽くすことはできない。臨床教育学においてこのテーマは，現状では心理臨床の実践からもたらされた知，すなわち「体験知」に立脚しながら「宗教性 spirituality」を論じている段階にあると言える。このような状況にあって，本論文は教育学研究領域において「宗教教育」の可能性を探求しようと試みたものであり，その際に『パンセ』をテクストとして取り上げ「レトリック論的解釈」という手法を用いたことは高く評価できる点であろう。

まず第1章では，日本におけるパスカル研究の歴史的経緯が手堅く概観されている。そのなかで著者は，日本の学校教育において「考える葦」が常套句となっていることを教科書研究を中心に明らかにし，そのことは同時に「考える葦」が近代教育学の研究対象としての価値を失うことに繋がったのではないかという注目すべき指摘をしている。そして，「レトリック論的解釈」の手法によって「考える葦」を再解釈する必要性に言及するが，その際に塩川徹也の論考に依拠しつつ言及し

ている点などは着実であると言える。

第1章を受けて，第2章では実際に「考える葦」のレトリック構造について検討されている。そこでは，「考える葦」は「考える肢体」というアフォリズムと一対の比喩言説として解釈されるべきであり，それによって初めてパスカルの人間観が明らかにされると考察されている。それはすなわち，「肉となった真理」を自然的次元での「肉」と超自然的次元での「真理」の逆説的結合のモデルと見立てることによって可能となる逆説的次元に生きる人間の在りようである。この考察は，きわめて注目に値する。それによって本論文を貫く鍵概念である自然的次元と超自然的次元という「世界の二重性」へと読者の視野を向けさせることに成功しているからである。

この「世界の二重性」とは，人間の生の在りようを「人間的次元」と「超越的次元」という異なる次元の逆説的結合と捉える概念でもある。これは，第4章で論じられるところの世界や人間の在りようとしての「二重性」を意味するtextureという概念と同意と言えるであろう。また，この論考は，第4章において論じられる「到来性」という注目すべき概念へと繋がっている。著者はこの概念によって，「超越的次元」における人間の生の在りようとして宗教を捉え，かかる宗教を教育する「宗教教育」の可能性を提示することに，かなりの程度成功している。

第3章で著者は，レトリックの認識構造のメカニズムを考察・検討しながら，本論文の強調点である「超越」について説明している。そうして，「考える葦／考える肢体」といった比喩言説の手堅い考察にもとづきながら，「宗教的真理」の開示と伝達において，この比喩言説が自然的次元と超自然的次元との関係構造の提示に貢献することが論じられているが，ここにも「世界の二重性」という著者の視点を明確に見ることができる。そして，本章の論考によって，著者の言う「宗教教育」の本質が次第に明瞭になってくる。すなわち，本論文において著者独自のタームとして新たに提唱されようとしている「宗教教育」とは，religious educationと呼ばれてきた教育の在りようではなく，むしろspiritual educationとでも表現できる在りようではないかと言うことができる。

この点は第4章においてさらに深められ論述されている。第4章では，『パンセ』は「到来性」を可能にする「texture性」を備えたテクストであることが明確に論じられている。一般に「到来」とは，聖書研究においてはキリストの降臨を意味する概念であり，「到来性」とは「精神の秩序」においては計り知ることのできない「真の秩序」からの贈与の在りようを示しているが，著者は『パンセ』の語りに着実に沿いながら「考える葦／考える肢体」という比喩言説を考察・検討することによって，「真の秩序」と精神の「無秩序」との関係の在りようが「到来性」という概念を用いて表現されるのではないかというきわめて重要な論考を展開している。この論考によって，「宗教教育」という著者独自のタームの本質が説得力をもって語られることになったと言うことができる。

終章はたんなるまとめではなく，本論文がもっとも主張しようとする「宗教教育」の必要性について，著者の意図が明瞭に述べられている好論考と言える。

以上のように，本論文は臨床教育学の発展に教育学研究領域から寄与するところ大であると言うことができる。しかしながら，論述の反復が多い点，とくに聖書研究がそうであるが，先行研究が蓄積してきた知見の紹介の乏しさ，異文化性と宗教性の連関についての言及の乏しさ，主張が論の構成以上に先走る点など，問題点もないわけではない。だが，それらは著者における今後の課題となるものであり，本論文自体の学問的価値をそこなうものとは言えない。むしろそれらの問題点は，著者が教育学研究領域において臨床教育学をより豊かに発展させる先駆者的な役割をはたしてゆくにあたって，充分に克服されていくものであり，知的挑戦の地平として著者に到来しているものと思われる。

よって，本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成17年2月2日，論文内容とそれに関連した試問を行った結果，合格と認めた。